

## ハイドロフォンによる水中音の聴取に関するサウンド・スタディーズ

岡崎, 峻

---

<https://doi.org/10.15017/4060174>

---

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士（芸術工学）, 課程博士  
バージョン :  
権利関係 :

氏名	岡崎峻		
論文名	ハイドロフォンによる水中音の聴取に関するサウンド・スタディーズ		
論文調査委員	主査	九州大学	教授 藤枝守
	副査	九州大学	教授 矢向正人
	副査	九州大学	准教授 池田美奈子

### 論文審査の結果の要旨

本論は、ハイドロフォン（水中マイク）の技術やその適用、聴取の方法などによって、これまで未知の領域であった海中の音の状態（サウンドステート）を解明するなかで、われわれの聴覚を変容（変質）させる可能性を論じた画期的な内容となっている。そして、哲学や人類学、自然科学、美学などの諸領域を大胆に横断しながら、知覚と自然現象の相互性に迫る認識論までに高められている。

ハイドロフォンは、海中（水中）のなかの聴取が困難な世界を可聴化する観測装置として開発され、当初は、軍事的な目的のためであった。しかしながら、この装置が予知しない水生生物との音による遭遇の機会を与え、いっきに音による海中環境の認識が広がったという。それにともない、海中の音による科学的な探求が進み、また、収集された海中の音世界があらたな想像力を喚起させる状況が作り出された。このような想像力によって、音楽や文学など、多様な水中音による芸術表現を生みだしていくが、本論では、このような芸術的な事例が克明に紹介されている。とくに、近年におけるサウンド・アーティストたちの表現行為に関して詳細な分析や解説がなされ、これからサウンド・アートというあらたな表現の方向に大きな影響を及ぼすであろう。

また、本論において重要な点は、ハイドロフォンがもたらす聴覚世界の拡張や芸術性への原動力の一端を、筆者自らが実践し、その体験が詳細に記述されていることがある。すなわち、自らハイドロフォンを製作し、海のフィールドレコーディングやワークショップの実践したプロセスが紹介され、その体験の記録が本論のなかに組み込まれ、筆者自らの「耳」を通じた海中音に関するリアリティに溢れた内容が盛り込まれている。

そして、最後に、本論は「聞くこと」の本質を問いかけている。一見、ハイドロフォンは、新奇な音収集のデバイスのようにみえ、海中（水中）という特殊な環境を対象にした内容に目が向かうかもしれない。しかしながら、身体の延長、あるいは拡張としてハイドロフォンを位置づけることによって、あらたな「音響認識論」の探究の成果として本論を捉えることによって、その意義の大きさを推し量ることができる。たとえば、ドローンによってあらたな視覚世界をわれわれは発見しつつあるが、ハイドロフォンも、また、海中という聴覚世界へのあらたな認識をもたらすであろうことは、本論からも十分に伝わってくる。だが、それ以上に、テクノロジーによってあらたに獲得した世界観がどのようにわれわれの知覚や認識を変容させるのか、その答えの一端を本論は、見事に言い当てており、そこには、一種の哲学的な視座もみいだすことができる。今後、この本論の内容をいかに発信するのか、あるいは、ハイドロフォンによる収録音のアーカイブ化の可能性に関して議論された。

論文調査委員会は学位論文の審査を実施し、その結果、岡崎俊氏の本論文は、博士（芸術工学）の学位を値するという判断に至った。